



2020年度日本語教育学会 各賞受賞者・受賞論文

理念体系の策定過程における事業再編で、学会の表彰事業を所掌する表彰委員会が設置されました。学会の「事業の3本柱」である学術研究・教育実践・情報交流の促進という事業方針を念頭において、各賞の位置づけや選考基準が明確になりました。新制度における各賞の表彰の対象者及び選考基準は、以下のとおりです。

学会賞：日本語教育に関してめざましい業績・成果があり、今後も活躍が期待される学会の個人会員に贈られます。

奨励賞：日本語教育に関して注目すべき業績・成果があり、将来の活躍が期待される学会の個人会員に贈られます。

功労賞：日本語教育界において長年の業績があり多大な貢献をした個人または団体に贈られます。

『日本語教育』論文賞：各年度、学会誌『日本語教育』に掲載された研究論文、調査報告、実践報告のうち、特に優れていると認められた論文に贈られます。

学会活動貢献賞：日本語教育学会の学会活動に貢献した個人を表彰することを目的とし、隔年で対象を変えて表彰します。今年度は、学会誌『日本語教育』の論文査読において、協力者として10年以上在任し、一定の件数の査読に尽力のあった学会の個人会員に贈られます。

各賞の選考過程

①学会賞・奨励賞・功労賞は、理事・監事・代議員・委員会委員の推薦を受けた候補、②論文賞は、学会誌委員会に置かれた候補論文選考部会の推薦を受けた候補論文、③学会活動貢献賞は、客観的なデータに基づき、表彰委員会の推薦を受けた候補が、会長・理事・代議員・各常置委員会委員より構成される授賞候補選考委員会に提出されました。授賞候補選考委員会の最終選考の審議を経て、理事会で最終的に決定しました。

2020年度の各賞の受賞者・受賞論文及びその授賞理由を、次ページよりご紹介します。

受賞者の皆様、おめでとうございます。益々のご活躍をお祈りいたします。

2020年度 日本語教育学会 学会賞

受賞者 川村 よし子 氏

【授賞理由】

川村よし子氏は『日本語読解学習支援システム Reading Tutor』（愛称『リーディング・チュウ太』）の開発者でコンピュータを用いた日本語教育に長年取り組んでこられました。川村氏は2000年10月から2002年3月までウィーン大学客員教授として日本語教育を担当し、ヨーロッパ各地で「インターネットを活用した読解教育」のセミナーを開催され、帰国後は国際交流基金、国立国語研究所等でワークショップを行い、日本語教育におけるICT普及に尽力されました。2003年より『リーディング・チュウ太』の辞書ツール多言語化プロジェクトを開始され、多言語版日本語辞書編集システムを開発されました。また、2010年4月から2014年3月まで日本語教育方法研究会会長を務められました。川村氏が中心となって開発された『リーディング・チュウ太』、『チュウ太のWeb辞書』、やさしい日本語自動書き換えシステム『チュウ太のやさしくな一れ』はWeb上で無償公開されました。

読解学習支援システム『リーディング・チュウ太』は誕生以来20数年、Web上で世界各国の日本語学習者によりよい読解支援環境を提供し、「工具箱」の「語彙チェッカー」や「辞書ツール」は世界の多くの日本語学習者・教育関係者に利用され、さらに、文章の難易度判定システム開発等の改良が重ねられました。

また、『チュウ太のWeb辞書』では、世界各国の日本語教育者・研究者の共同作業をインターネット上で自由に行える多言語版日本語辞書編集システムを構築されました。このシステムを利用して、20を超える言語による日本語辞書が編集され、編集協力者も100名を超えました。このシステムでは編集が完了した単語は自動的にWeb辞書としてインターネット上で公開される仕組みになっており、辞書編集者が自らの成果をその場で確認できるばかりでなく、世界各国の学習者もそれを利用することができました。この多言語環境における共同編集、教材共有化等は、ICT社会における教育関係者間の新しい連携のあり方を示すものです。なお、この成果は書籍として監修された『ポータブル日タイ英・タイ日英辞典』（三修社、2015年）をはじめ、ベトナム語・マレー語・インドネシア語の辞書にも展開されています。

さらに、『チュウ太のやさしくな一れ』では、やさしい日本語による読解支援環境を整えられました。これによって、日本語学習者のみならず、日本在住の日本語非母語話者や日本人の年少者・高齢者など、言語マイノリティに役立つ日本語の読解支援が可能になりました。

川村氏は日本語教育におけるICT活用の先駆者であると同時に、第一人者としてこの分野を牽引し続けていらっしゃいます。川村氏のこの功績をたたえるとともに、今後のさらなる活躍に期待し、川村氏に日本語教育学会賞を贈ります。

以上

2020年度日本語教育学会奨励賞

受賞者 藤本 かおる 氏

【授賞理由】

藤本かおる氏は、2011年に首都大学東京博士後期課程を満期退学され、現在は、日本大学大学院の博士後期課程に在籍されています。日本語教育学、教育工学、遠隔教育、サブカルチャーを専門としていますが、これまでに、多様な教育機関で、多様な学習者を相手に、多様な形の日本語教育に携わってきました。2016年より武蔵野大学グローバル学部日本語コミュニケーション学科の准教授として、日本語教育のほか、日本研究（文化・文学・サブカルチャー）なども担当なさっています。

2004年からICTに関わる研究に携わり、2010年には、「遠隔教育における初級日本語教育でのweb会議の利用とその考察—台湾・インド・中国とのブレンディッド・ラーニングを通して」と題する発表で、日本e-Learning学会2010年学術講演会学会優秀賞を受賞されました。

2017年からは、教育工学と日本語教育をつなぐ分野で精力的に研究を進められ、その集大成として、単著『教室へのICT活用入門』（国書刊行会）を2019年11月に出版されました。

その矢先に、2020年の世界的な新型コロナウイルス感染拡大に対応するため、オンラインによる授業が余儀なくされ、多くの日本語教育機関、日本語教師が戸惑う中、藤本氏はセミナーや無料のオンラインカフェなどを多数開催し、オンライン授業を行うためのわかりやすい発信を続けました。それに救われた日本語教育実践者が大変多かったことは特筆に値します。

単著「日本語初級レベルのグループオンライン授業での教室活動に関する研究—担当教師へのインタビューを中心に—」（『日本e-Learning学会誌』19巻、2019年）や「コロナ禍による授業のオンライン化に関する日本語教師の取り組み—オンライン授業の実践に関する教師へのアンケートから—」（『2020年度日本語教育学会秋季大会予稿集』、2020年）など、着々と研究を深めていらっしゃいます。ICTはコロナ禍下だけでなく、社会において大きな役割を果たすものとして、その研究はますます必要なものとなっていくと思われます。

日本語教育に関する研究と実践を包括した幅広い活動を評価し、また、今後のさらなる活躍を期待して藤本かおる氏に日本語教育学会奨励賞を贈ります。

以上

2020年度日本語教育学会奨励賞

受賞者 柳田 直美氏

【授賞理由】

柳田直美氏は、2004年に筑波大学大学院修士課程地域研究研究科を修了後、同じく筑波大学で2013年に博士（言語学）を取得され、談話分析研究を中心に、日本語教育に関する研究および実践の両面で積極的に活動を続けてこられました。特に、接触場面における母語話者側のコミュニケーション方略に着目し、第6回日本語教育学会林大記念論文賞を受賞した論文「非母語話者との接触場面において母語話者の情報やり方略に接触経験が及ぼす影響—母語話者への日本語教育支援を目指して—」（『日本語教育』、2011年）や、博士論文にもとづく著書『接触場面における母語話者のコミュニケーション方略—情報やりとり方略の学習に着目して—』（ココ出版、2015年）など、示唆に富む研究成果を発表されています。

近年では、その研究活動は〈やさしい日本語〉に関する論文として多くまとめられ、庵功雄・イヨンスク・森篤嗣 編『「やさしい日本語」は何を目指すか—多文化共生社会を実現するために—』（ココ出版、2013年）や共編著『〈やさしい日本語〉と多文化共生』（ココ出版、2019年）等において発表されています。柳田氏の論考は、現在、注目を集める〈やさしい日本語〉研究の理論の確立に寄与するとともに、母語話者の言語行動に対する非母語話者の「評価」に焦点を当てることにより、ともすると言語的な調整の問題にのみ目が向けられがちな〈やさしい日本語〉研究に、コミュニケーションのあり方の立場から重要な視座を与えています。また、その研究成果は、学術的な論考にとどまらず、外国人住民に実際に接する機会の多い自治体職員に対する数多くの研修会や講演を通じて、日本語教育界を越えた実績を上げています。この一連の活動の成果は、岩田一成氏との共著『やさしい日本語で伝わる！公務員のための外国人対応』（学陽書房、2020年）として出版されました。こうした柳田氏の学術研究に根ざした社会貢献は、まさに本学会の使命とするところの具現であり、高く評価されるに値するものです。

さらに、柳田氏の研究は、「評価」「話し合い」といった観点をはじめ、多方面に発展を見せており、たとえば「異文化間の話し合いにおける参加者の変容プロセスの解明—対話能力の育成を目指して」（2020年度-2022年度、科学研究費基盤研究（C））等、多数の研究課題に研究分担者として参画されています。所属する一橋大学では、留学生に対する日本語教育とともに、大学院における日本語教員養成と日本語教育学の研究者養成にも日々ご尽力なさっており、そうした授業実践や教員養成の視点は、岩田一成編『語から始まる教材作り』（くろしお出版、2018年）、共著『超基礎日本語教育』（くろしお出版、2019年）といった書籍の中の論考に活かされています。

このように研究と実践の両面において、惜しみなく力を注ぐ柳田直美氏の日本語教育界への貢献を称えるとともに、今後のさらなる活躍を期待して、日本語教育学会奨励賞を贈ります。

以上

2020年度 日本語教育学会 功労賞

受賞団体 ヨーロッパ日本語教師会

【授賞理由】

ヨーロッパ日本語教師会 (Association of Japanese Language Teachers in Europe, e.V., AJE) は、欧州各国において日本語を第一言語としない者に対する日本語教育の振興を図り、欧州と日本の相互理解を深めることを目的として設立されましたが、ヨーロッパの日本語教育のネットワークの中心となるだけでなく、日本をはじめ、世界の日本語教育との連携の窓口としての役割も果たしてこられました。

毎年、欧州各国の団体との共催で、「ヨーロッパ日本語教育シンポジウム」を開催し、欧州以外からの日本語教育関係者も多く参加しています。シンポジウムについては、毎年、報告書「ヨーロッパ日本語教育」を出版しています。また、ニュースレターを発行し、AJE 主催の活動のみならず欧州での日本語教育関係の活動報告や情報を発信してきました。欧州のニーズに対応した活動として、会員有志で結成されたチームによるプロジェクトも行い、CEFR プロジェクト、J-GAP プロジェクトなどが行われてきました。特に、2011年-2016年に行われた AJE-CEFR プロジェクトでは、CEFR が確実に浸透してきた欧州の言語教育現場において、日本語を外国語の1つとして普及・発展させていくためには CEFR という共通の基盤を共有しながら他言語と足並みを揃えていく必要があること、そしてそのためには CEFR をツールとしてだけではなく、その成立の背景にある理念をより深く理解し、かつ日本語の特色に配慮しながら教育現場に取り入れていくことが急務であるという現状から、「ヨーロッパの日本語教育現場の教師たちは今何を一番必要としているか」を検証しそれに対する対策を提供することをプロジェクトの課題として様々な側面から CEFR と日本語教育をつなぐ活動を行いました。この活動は、ウェブサイトでの報告書や関連の刊行物として成果が公開されています。

周知のとおり、国際交流基金の JF 日本語教育スタンダードをはじめ国内の日本語教育においても CEFR の導入が進められています。このように、AJE の研究と実践の活動が欧州外にも発信され、海外だけでなく、日本国内の日本語学習者・教育者・研究者への大きな貢献となっていることは、意義深いことと思われま

す。2018年には、マリオッティ会長(当時)を実行委員長としてヨーロッパ初の ICJLE ヴェネツィアが「平和への対話」をテーマに開催され、活発な議論の場となりました。論文集も発行されています。

以上により、ヨーロッパ日本語教師会のこれまでの功績を称え、ここに日本語教育学会功労賞を贈ります。

以上

2020年度『日本語教育』論文賞受賞論文

非母語話者は母語話者の〈説明〉をどのように評価するか —評価に影響を与える観点と言語行動の分析—〔研究論文〕

掲載号：『日本語教育』177号（2020年12月発行），pp. 17-30

執筆者：柳田直美氏（一橋大学）

【授賞理由】

本論文は母語話者の「説明」に対する非母語話者の評価について、観点と言語行動を対象に量的データ（評価データ）と質的データ（談話データ）を用いて検証した論文である。堅実な計画デザインに基づいて丁寧に検証されており、内容はもちろん方法に学ぶ点も多い。本論文の成果は、ともすれば言語的調整の技術論に偏りがちな「やさしい日本語」をコミュニケーションの文脈に戻す力を持っており、日本語教育関係者のみならず、すべての日本語母語話者に示唆を与えるものとなっている。また、本研究が「日本語教師ならやさしい日本語が使える」というバイアスに警鐘を鳴らしている点にも注目したい。「日本語教師らしさの功罪」を客観的に指摘する本論文は、日本語教師の専門性を謙虚に捉え直すための問題提起であり、本学会こそが真摯に受け止めるべき研究であると言える。

(1) 日本語教育現場に対する示唆が具体的である。

本研究では、母語話者の「説明」に対する非母語話者の評価データから因子を抽出し、その意義を談話データの観察により裏付けている。日本語教師経験者に期待されがちな言語的な細かな調整よりも、会話へのかかわりの度合いや相手の理解度に合わせた調整が非母語話者の評価に影響を与えているという示唆は、具体的で説得力がある。

(2) 新しいテーマにチャレンジしている。

本研究は、非母語話者が母語話者の説明をどのように評価するか、一方向的な聞き取りではなく、母語話者と非母語話者の双方向のやりとりを対象に、非母語話者の視点から調査をおこなっている。非母語話者の言語行動だけに注目するのではなく、母語話者の言語行動を対象とした本研究は、日本語教育研究の対象範囲を広げる可能性を示唆している。

(3) 専門領域を超えて訴えるものがある。

行政における窓口対応を意識した「説明」という設定は、基礎研究としての検証を優先するのであれば負担ともなり得る。それを乗り越え、敢えて社会的課題に即した設定を採用した本研究は、日本語教育発のコミュニケーション研究として専門領域を超えて訴えるだけの価値がある。本研究は日本語教育関係者のみならず、自治体等の窓口対応をはじめ、非母語話者に対するあらゆる「説明」場面において有益な示唆を与えるものである。

以上

受賞論文 要旨

非母語話者は母語話者の〈説明〉をどのように評価するか

—評価に影響を与える観点と言語行動の分析—

外国人住民の急増を背景に、非母語話者に情報をわかりやすく伝えるための言語的調整である「やさしい日本語」についてさまざまな提案が行われている。しかし、それらの調整は情報を受け取る側の非母語話者からどのように評価されているのだろうか。本稿では、母語話者の〈説明〉に対する非母語話者の評価結果を検証し、評価に影響を与える観点と言語行動について分析した。分析の結果、「積極的な参加態度」「落ち着いた態度」「相手に合わせた適切な説明」が評価に影響を与えることが明らかになった。さらに、非母語話者からの評価が高い母語話者と低い母語話者を比較したところ、会話への積極的なかわりや相手の理解への配慮を示す言語行動、そして対等な関係性を前提としたふるまいが評価に影響を与えていることが示唆された。このことから〈説明〉場面においては母語話者の非母語話者の理解度に配慮した対応が高く評価されるといえよう。

How Do Non-native Speakers Evaluate Native Speakers' Explanations?: An Analysis of Perspectives and Linguistic Behaviors Affecting the Evaluation

YANAGIDA Naomi

The number of foreign residents has been rapidly increasing in Japan. Consequently, various proposals promoting *Yasashii Nihongo* ('Easy Japanese'), which is a linguistic adjustment, have been put forth as a way to facilitate communication with non-native speakers. However a question arises: how are these adjustments evaluated by the non-native speakers who are recipients of the information conveyed? In this paper, I examine the non-native speakers' evaluations of explanations given by native speakers, and analyze their evaluation perspectives and linguistic behaviors that affect the evaluation. The results indicate that "positive attitude of participation," "calm attitude," and "appropriate explanation according to the partner" were perspectives that affected the evaluation. In addition, a comparison of the verbal behaviors of high-and low-rated native speakers suggested that "active engagement in conversation," "verbal behaviors that considered the partners' comprehension," and "behaviors that were based on an equal relationship" influenced the ratings. Thus, it can be concluded that native speakers are highly regarded for considering the level of non-native speakers' comprehension while explaining something to them.

(Hitotsubashi University)

2020年度 日本語教育学会 学会活動貢献賞

受賞者一覧 (50音順)

【授賞対象】

2020年度は、学会誌『日本語教育』の論文査読において、協力員として10年以上在任し、一定の件数の査読に尽力のあった学会の個人会員の皆さまに、学会活動貢献賞を贈ります。

大島 弥生 氏

小澤 伊久美 氏

小河原 義朗 氏

木谷 直之 氏

小林 由子 氏

杉村 泰 氏

砂川 裕一 氏

西口 光一 氏

野田 春美 氏

坂野 永理 氏

深田 淳 氏

許 明子 氏

三宅 和子 氏

以上